

第1章

なぜ、今アーギュメント [ディベート]力が重要なのか

1 なぜアーギュメント力が重要なのか

英語を話すと言っても、一対一の会話もあれば大衆の前でするパブリックスピーキングもあります。また対話には、大きく分けて“**chat**”、“**discussion**”、“**debate**”の3種類があります。最近になって特に重要性を帯びてきたのが最後の“**debate**”能力で、そこでは“**argument**（理由を挙げて自分の意見を論理的に主張する）”能力が重要となってきます。

chat は、すばり気軽に友達と交わす「おしゃべり」。最近インターネット用語でもおなじみで日本語化してきた感があります。話題が次々と変わり、深く1つのことについて掘り下げる必要もないし、相手が聞いたことに返事をしなかったり、全然理由になっていない弁解をしたりと、何でもありで気軽に話すことです。

discussion はもう少し真剣で、意見交換や、何かの結論を得ようとして「話し合う」ことですが、取り立てて結論が出なくても、また何かを決めることができなくても大した問題ではありません。ちょうど **chat** と次に説明する **debate** の間に位置しているのが、この **discussion** なのです。**debate** との違いは、何らかのトピックについて必ずしも「肯定側」と「否定側」に分かれて意見を戦わせるというわけではなく、相手に同意したり反対したりして説得しようとはしているものの、あくまでも自分の主張のみを証明しようとする勢いが弱いものです。また、話し合う話題も、「日本はサマータイム制を導入すべきか」のように社会論争となっている1つの問題を掘り下げて、それにぴったりと関連する (**specific and focused**) ことのみを話し合う **debate** と違って、**discussion** では話し合うトピックは決まっていますが、そのトピックから発展して幅広い問題を扱っていきます。

debate は **chat** や **discussion** とは違い、世の中の論争となっているような社会問題を、完全に「肯定側」と「否定側」の2つに分かれて、徹底的に分析し、意見を戦わせます。決して反対側に同意することなく自分の意見を証明し、相手の意見には限られた時間内に反対尋問か反論をし、最後にジャッジの判定を受けます。とまあ一見、スポーツの試合のように思えますが、ディベ

トには次のように数多くのメリットがあります。

1. 論理的に物事を考える能力・分析力 (critical analysis / reasoning ability) が養われる。
2. 社会問題に関する深い知識と洞察が身につく。
3. 英文速読速解力が鍛えられる。
4. 自分の意見を効果的に人に伝える能力、つまり説得力 (persuasiveness / eloquence) が養われる。
5. 人の話を素早く正確にキャッチするリスニング力が養われる。
6. 対立する立場に立って物事を捉える (put issues into perspective) ことができる。

“Toulmin’s Model” によれば、ディベートにおける推論は次の3つの要素から成り立ちます。A “**Claim**” should be supported by 1) “**Warrant**”, or theoretical justification or rationalization on which the argument is built, and 2) “**Data**”, or evidence by which the argument is proven. Therefore, debates helps develop abilities to think and analyze logically, and organize our arguments into a structured framework.

(“主張”をサポートするものは、1) アーギュメントの基になっている“根拠”または理論上正当な言い分 2) アーギュメントを証明する“データ”または証拠の2点。ゆえにディベートをすれば、論理的に考え分析する能力が養われ、理路整然とした意見を構築できるようになる。)

つまり、**data** (データ [事実・統計・専門家の意見]) と **warrant** (ワラント [正当な理由・根拠]) によって **claim** (クレーム [主張]) するので、上の6つが養われるのです。まず、論理分析 (logical analysis) を主張するために膨大なデータを調べなければいけないので、速読速解力が鍛えられ、また社会問題に関する知識と洞察が深まるので、英文献を速く深く読むことができるようになるわけです。そして、勝つために **claim** を無駄なく、素早く述べ、相手を説得しなければならないので、英語による発信力 [コミュニケーション力] がぐーんと UP していきます。またディベートでは、相手が主張する間、言

葉をはさまず聞いて反対尋問したり反論したりしなければならないので、リスニング力が数段 UP します。

さらにディベートでは、意見を戦わせると同時に釈迦の「八正道」(**Noble Eightfold Path**)に通じる精神、つまり、自分の意見に執着することなく、自分と反対側の意見を考慮に入れ、相手の立場に立って物事を捉えることができる境地に達することができます。というのはディベーターはどんなトピックでも、常に肯定側と否定側の両方の見地を掘り下げておかねばならず、その意味で私情にとらわれることなく常にクールに大局 (**broad perspective**) を観ておく必要があるからです。ディベートの目的は「真理の追求」であり、その意味で勝負の「結果」よりも真理を追究する「プロセス」を重視した「悟りの境地」への道といえます。

さて、ディベートの意義がわかっていただけたところで、今度はその原点である **“argument”** と日本語の「議論」の違いを考えてみましょう。**argue** は、よく「議論する」と訳されますが、実際に英英辞典で「意見を述べる」という観点からの定義を見てみましょう。

1. To disagree with someone in words, often in an angry way
(反対意見を述べること、怒った口調であることも多い)
2. To discuss something with other people, giving your different opinions.
(異なる意見を出し、何かについて他の人々と話し合うこと)
3. To state that something is true or should be done and give the clear reasons why you think so. (何かが真実である、あるいはなされるべきであると述べ、そう考える明確な理由を挙げること)
4. To support your opinions with evidence in an ordered or logical way.
(理路整然と証拠を示しながら、意見の正当性を証明すること)

これに対して日本語の「議論」は「互いに自分の意見を論じ合ったり、戦わせたりすること」とあります。これは **“argue”** の 1 に似ています。日本語では説明されていない **“argument”** の大切な点は、「自分の主張に明確な理由を

挙げて、その妥当性を証明する」という点です。

日常生活では、人々は直感的に好き嫌いで判断して意見を述べたり、何も疑うことなく「社会通念」に従って他人を説得しようとしがちです。また勝手な解釈、感情的・主観的な評価をし、自分の考えを証明しようという義務感もなく、納得のいく説明もせず結論を述べるなど、本当に気ままに意見を述べがちです。この傾向は特に日本社会において強いようです。

米国を含む西洋諸国はよく“argument culture”と呼ばれ、法廷論争、presidential debate（大統領候補討論会）、ビジネスでの交渉、学会発表やoral defense（口頭試問）などに見られるように、argumentが世の常（the norm, the order of the day）となっています。実際、日常会話でもEnglish Journalの“Talking Match”に見られるように、賛成か反対か“dichotomize”（二分して）argueするといったケースが多く見られます。しかし相対的に日本人はそういったargumentは「和の精神」に反するとして避けたがる（unconfrontational）か、あるいは議論において、倫理観や主観に基づいた善悪の判断はしますが、「なぜ」という理由付けをしない傾向があります。

これは日本人の子供のしつけ方や教育の仕方にも大きな原因があります。米国では“individualism”に基づき、親は子供にはっきりと自分の意見を持ち（have a mind of one's own）、きちんとした理由を述べる（make a case）ように教育します。ケネディ元大統領の家庭では家族の団欒のときにディスカッションをして、子供にその訓練をしたと言われています。学校でのクラスルームディスカッションでも、自分の意見を論理的に述べる練習をします。ところが日本では、「親や教師の言うことは聞くものだ」と頭ごなしに言われたり、授業でディスカッションすることもほとんどなく、また社会でも反論すると失礼になると思って躊躇するなど、“argument”の土壌ができていません。

その結果、日本人は理由を挙げずに、直感的に意見を言うだけというスタイルでコミュニケーションするのが当たり前になっています。相対的に英語のネイティブスピーカーは、何かのポイントを述べた後で理由を聞かれなくても、“,because ~”と理由を述べる場合が多いですが、日本人は「それはどうしてですか？」と聞かれてから理由を述べるケースが圧倒的に多いようです。ゆえにネイティブは何らかの質問に対する答えが長くなりがちですが、日本人はぼつと一言述べるか10秒ぐらいで終わってしまうことが多々あります。

英語圏の人たちは、ほとんどの場合、相手に対して「自分の意見の方が強いことを示そう」とします。彼らのコミュニケーションは、客観的な証拠に基づいて議論をし、自分の意見の優位性を相手に理解させようとしているのが基本的な形なのです。ところが日本人の場合は、どうも「感情中心」「倫理中心」に話を進め、客観的な証拠に基づいて話すということが苦手です。これが国際コミュニケーションにおいて相互理解を進めていく上で日本人にとっての障害となっています。また日本人の英語での発信力を弱めているのも、英語表現力というよりは、この「論理的分析 & 説得力」が苦手であることが大きな要因となっています。

ところで、こういった説得方法の文化的相違をより深く認識し、コミュニケーションにおいて次の3つを相手に説得するために、効果的に話す主な方法を簡単に説明しておきます。

- ① **ethos** (イースス) – **credibility** 社会の通念や常識、道徳観、話者の人間性やステータスなど信用の源となるもの
- ② **pathos** (パトス) – **appeal to emotions** 情、特に哀れみ
- ③ **logos** (ロゴス) – **appeal to reason** 正当な理由、論理性

ethos とは **credibility** のことで、クリントン元大統領が大統領選のキャンペーンスピーチで、自分が中流家庭の出身であることを強調して **ethos** に訴えようとしていました。また、「ノーベル賞受賞者の〇×が言っているが……」とか、「これは欧米では世の常になっていますが……」と言い説得力を増したり、家柄、学歴などを引き合いに出すのも **ethos** です。

pathos は、ブッシュ大統領がキャンペーンスピーチで目に涙をためて訴えようとしていたように、人間は「感情の動物」なので、この効果は絶大です。

logos は今までに何度も述べてきた論理性のことで、この **justification** なければ説得力に欠けることはいうまでもありません。しかし、これだけでは頭で分かって人も人の「心や行動」を変えることはできません。そこで人を説得する場合は、これら3つをすべて使うのです。

英語の文化は③にかなりの重点を置くのに対し、日本の文化は①や②をより重視したため、③があまり発達しなかったわけですが、国際社会では日本の常

識 (ethos) は通用しないので、まず logos を鍛え “argument” 力を高めないと、説得力が弱く色々な状況生き抜いていけません。

さらに、米国やカナダ等の大学に留学するために受ける TOEFL の試験内容が 2005 年から大幅に変わり、「受信型」である文法や読解問題がぐーんと減り、「発信型」であるスピーキングやライティングの問題が大幅に増える予定です。それは留学生がレポートや論文を書いたり、プレゼンをしたりクラスルームディスカッションをする「発信力」(会話や chatting の能力ではなく、論理的に意見を述べる能力) において余りにも問題があることの反省によるものと言われています。他にも米国の大学院に入学するための試験である GRE に、次のようなタイプの、何らかの argument に対して問題点を指摘するタイプとライティング問題が加わり、そこでも論理的に意見を述べる「発信力」がいかに重要かがよくわかります。

Present your perspective on the issue below, using relevant reasons and / or examples to support your views.

(以下のトピックについて理由や例を挙げて自分の考えを述べなさい)

1. There are two types of laws: just and unjust. Every individual in a society has a responsibility to obey just laws and, even more importantly, to disobey and resist unjust laws.
(法律の妥当性を論議する—悪い法律は守る必要がないのか!?)
2. Public figures such as actors, politicians, and athletes should expect people to be interested in their private lives. When they seek a public role, they should expect that they will lose at least some of their privacy.
(プライバシーの権利を論議する—有名人もプライバシーを持てるのか!?)
3. The primary goal of technological advancement should be to increase people's efficiency so that everyone has more leisure time.
(技術の進歩の目的を論議する—テクノロジーは効率を高め余暇を増すた

めに進歩すべきか!?)

4. Because learning is not a solitary activity but one that requires collaboration among people, students of all ages will benefit academically if they work frequently in groups.

(共同研究の意義を論議する—1人より共同で研究する方が利が多いか!?)

5. To truly understand your own culture-no matter how you define it-requires personal knowledge of at least one other culture, one that is distinctly different from your own.

(異文化洞察の意義を論議する—自国の文化を知るには異文化を知らねばならないのか!?)

オラルコミュニケーションの観点では、英検1級・通訳ガイド試験・国連英検の2次試験や、ケンブリッジ英検のスピーキングテストなどで、社会的なトピックについてどれくらい自分の意見を述べ、相手の質問や反論をさばけるかが重視され、その能力がテストされます。特に英検1級の2次試験では、論理的に英語で意見を述べる能力を重視しており、与えられた社会問題のトピックについて英語でのプレゼンと、その後の試験官の質問に対して答える口頭試問によって、効果的にそういった能力があるかどうかをテストしています。

皆さん、このように英語で論理明快にプレゼンをしたり、社会問題を論理的に話し合ったりディベートしたりする重要性はどんどんと高まっています。家族間で子供に対して親が、「とにかく親の言うことをきいておけば、間違いないんだ!」と頭ごなしに説教するのも最近は通用しなくなってきています。そして、ますます国際化する社会では、法廷ではもちろん、ビジネス・政治・教育・学問の場においても、なぜそういうことを言うのか、なぜそれが必要であるかの理由を明確にできればよりよい成果を上げることができます。

それがただのおしゃべりよりワンランク上であるのは、様々な社会情勢や事象に関する知識とそれらを英語で述べる表現力、そして自分の意見を筋道立て

て述べる「論理的分析力」がいるからです。こういった社会的トピックについて論理明快に意見を言うようになるには、英会話クラスに週1～2回行ったり、友達と勉強会でネイティブを招いて会話の練習をしているだけでは不十分です。そこで皆さんには、この本を通じて論理性を鍛えながらしっかりと「アーギュメントの構築方法」を学んでいただき、説得力のある話し方やディベートができるようになっていただきましょう。

Let' enjoy the process! (陽は必ず昇る！)

1

なぜ、今アーギュメント「ディベート」力が重要なのか